

「しかとっちゃん」シカ捕獲マニュアル



「しかとっちゃん」で捕獲したシカ

令和7年9月

山口県農林総合技術センター

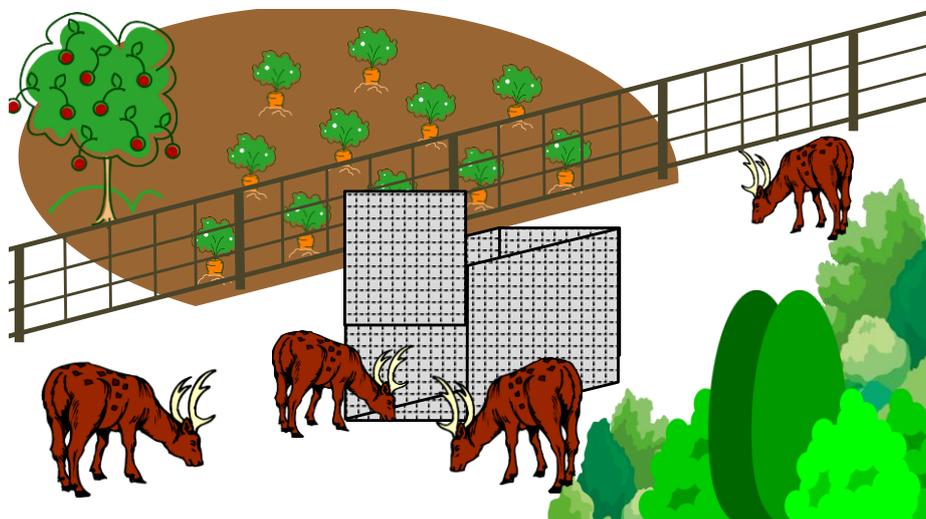
はじめに

山口県に生息するシカ（ホンシュウジカ）は、低山から亜高山の森林に分布し、ササ類や木の葉、ドングリなどを食べて暮らしています。ふだんはオスとメスが別々の群れで生活し、秋の繁殖期になると、オスが複数のメスを従えた「ハーレム」を形成します。

これまで山口県におけるシカの生息域は県西部に限られていましたが、近年は長門市や下関市から美祢市・萩市を経て、東部へも拡大しています。生息密度が高い地域では、角擦りによる樹皮剥ぎや林床植物の消失などによって森林が深刻なダメージを受けています。被害は、林業でのスギ・ヒノキ造林木の角擦りや幼木の食害が深刻な問題となっていますが、農業でも水稻・イモ類・豆類などの作物の食害が発生して問題となっています。

県ではこの課題に対応するため、四国森林管理局の「こじゃんと2号」の構造を生かし山口県のシカに対応した、シカ専用「山口型小型囲いわな」（愛称：しかとっちやる）を開発した。

本マニュアルでは、「しかとっちやる」の開発と4年間の実証試験の成果をもとに、農地周辺での実用的な捕獲手法を紹介します。農林業被害の軽減に向け、行政・狩猟者・農林業者の皆様の参考になれば幸いです。



シカ専用わな「しかとっちやる」の捕獲イメージ

目 次

1	シカの捕獲方法	1
	わな猟における長所と短所	1
2	山口県で開発したシカ専用わな「しかとっちやる」	2
	(1) 「しかとっちやる」の特徴	2
	(2) 「しかとっちやる」の仕様	2
3	「しかとっちやる」によるシカ捕獲の手順とポイント	3
4	耕作放棄地を活用したシカ捕獲	4
	(1) わな設置場所の選定（シカが集まる耕作放棄地を選択）	4
	(2) 耕作放棄地の整備	5
	(3) シカの誘引を強化（耕作放棄地にシカを誘引）	5
	(4) わなの設置	6
	(5) 捕獲開始	7
	(6) わなの見回り	8
	(7) 捕獲・殺処分	8
	(8) 新たな場所へ移動	8

※ 「しかとっちやる」製作資料（別冊）を添付

1 シカの捕獲方法

シカを捕獲するには、捕獲する目的や場所、捕獲数によって捕獲手法を選定する必要があります。また、シカの生態的特徴をよく理解することが、捕獲効率を高めることにつながります。

なお、捕獲方法は、わな猟や銃猟など様々な方法がありますが、それぞれ長所と短所があり、目的に応じた捕獲方法を選択することにより効率的な捕獲が可能となります。

ここでは、わな猟の捕獲方法について説明しますので、参考にして下さい。

わな猟における長所と短所

捕獲手法	期待される捕獲頭数	長 所	短 所
くくりわな	1頭	<ul style="list-style-type: none"> ・運搬が容易 ・地形の影響を受けない ・餌付けが不要 ・わなの経費が安い 	<ul style="list-style-type: none"> ・設置する場所の選定や設置方法に熟練が必要 ・捕獲確認のため頻繁な見回りが必要 ・錯誤捕獲が発生する可能性が高い
箱わな	1～2頭	<ul style="list-style-type: none"> ・分解組み立てできるものは運搬・設置が容易 ・設置に必要な平坦な場所の面積は、2m×3m程度なので、林内の設置も可能 	<ul style="list-style-type: none"> ・平坦な場所がないと設置が困難 ・餌付けしないと捕獲できない ・餌付け・捕獲確認のため、頻繁な見回りが必要 ・錯誤捕獲の可能性はある ・1回の捕獲頭数が1～2頭なので、わな周辺に集まったシカの獲りこぼし、学習ジカを生み出す可能性がある
囲いわな	複数頭～ 10数頭 (囲いわなの大きさに より異なる)	<ul style="list-style-type: none"> ・複数捕獲が可能 ・群れごと捕獲できることから、シカに学習する時間を与えず捕獲することが可能 	<ul style="list-style-type: none"> ・平坦な場所でないで設置が困難 ・餌付けしないと捕獲できない ・餌付け・捕獲確認のため、頻繁な見回りが必要 ・錯誤捕獲の可能性はある ・施設の経費が高価であり、設置も大変 ・遠隔操作式・自動落下式はシステムの費用が高い
大型誘導柵と囲いわなを用いた追い込み	10数頭	<ul style="list-style-type: none"> ・複数捕獲が可能 ・群れごと捕獲できることから、シカに学習する時間を与えず捕獲することが可能 	<ul style="list-style-type: none"> ・追い込み可能な傾斜やシカの利用状況等の条件から設置場所が限られる ・柵の設置費用及び人件費が嵩む ・追い込みに人数がかかる ・オスを追い込む場合には危険を伴う

くくりわな：シカが利用する獣道で、ワイヤー等で作られた輪によって足を括って捕獲する手法

箱わな：全面が金網や板等で囲われた箱状のわなで、箱の中に閉じ込めて捕獲する手法

囲いわな：基本構造は箱わなと同じだが、上面（天井）部分がなく、周囲を杭や柵で囲い込み、その中に閉じ込めて捕獲する手法

2 山口県で開発したシカ専用わな「しかとっちやる」

(1) 「しかとっちやる」の特徴

- 軽トラックで運搬できる大きさ・重量
- わなの設置は軽トラックから降ろして10分程度
- 扉の開口部が一般の箱わなよりも高い
- 大型のシカが脱出しにくい構造
- 鉄工所で製造が可能（設計書を公開）
- 一般のシカ用わなより低価格
- 一般のわなと同等の捕獲効果

○「しかとっちやる」は、軽トラックで運搬可能な大きさ・重量であり、設置場所の近くまで運搬すれば約10分間で設置できるなど、農地周辺に出没するシカを捕獲する時に、機動的な設置・移設が可能です。

(2) 「しかとっちやる」の仕様

・わなの大きさ

縦 幅：165 cm

横 幅：95 cm

奥 行：185 cm

開口部：110 cm

・重 量：93kg

・外側から6本のアンカーで固定

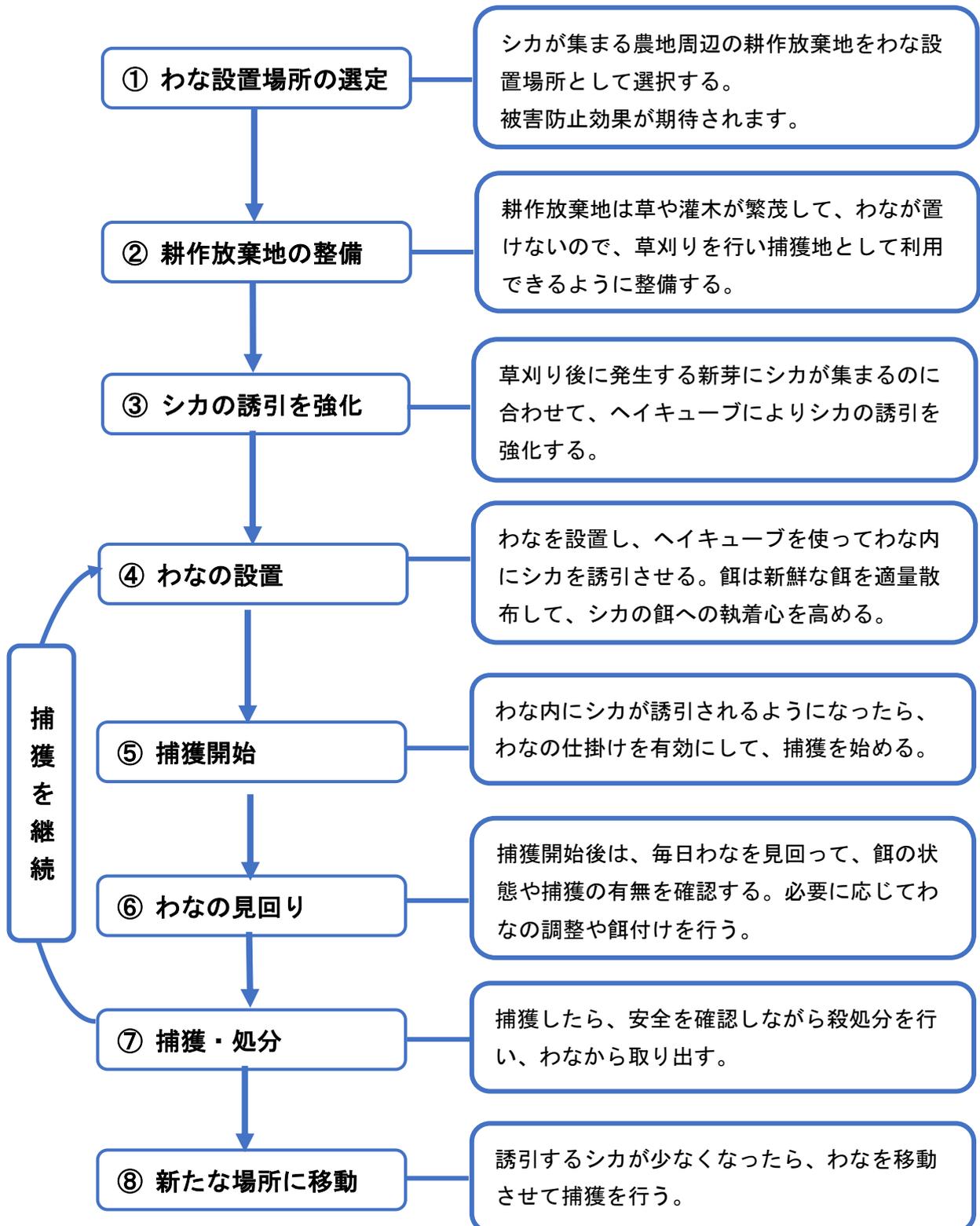
・わなの移動は軽トラックで運搬可能

・制作費：11万円（税込み）



3 「しかとっちやる」によるシカ捕獲の手順とポイント

「しかとっちやる」によるシカ捕獲は、箱わなによる捕獲手順と同じですが、山口県では、シカが農地周辺の耕作放棄地に集まっている場所が多く見られるので、シカが集まっている耕作放棄地でのシカ捕獲手順とポイントを示します。



4 耕作放棄地を活用したシカ捕獲

わなで捕獲を行う場合、わなの周りにシカを誘引することが重要ですが、シカが集まる場所が分かれば、その場所にわなを設置することで効果的な捕獲が可能となります。

山口県では、シカが農地周辺の耕作放棄地に集まり、出没密度が極端に高くなっている場所が多くあります。特に、農地周囲に侵入防止柵が設置されている場所では、柵により農地に入れないシカは柵に沿って移動しながら耕作放棄地に集まっていますので、効果的な捕獲を実施しましょう。

耕作放棄地でわな捕獲を行う場合の問題点としては、①雑草や灌木に覆われてわなが置けないこと、②水が溜まってわなが置けないこと、③餌付けによってシカが集まり農業被害が発生する危険があること等があります。①の雑草・灌木については、わな設置場所の草刈りで対応します。②の水溜りについては、排水対策が出来なければ捕獲地として利用しない。③の誘引による農林業被害の危険性については、侵入防止柵の管理と捕獲を並行して行うことで被害を未然に防ぐことができます。

侵入防止柵が整備されていない農地周辺での捕獲は避けましょう。

(1) わな設置場所の選定（シカが集まる耕作放棄地を選択）

侵入防止柵により農地に侵入できないシカは、柵の外側の耕作放棄地に集まるので、捕獲地として利用しましょう。耕作放棄地は平坦で農地に近いことから、軽トラックによるわな運搬が可能であり、捕獲地に適しています。

農地周辺で効果的なシカ捕獲ができれば、農地に被害を出す個体を直接捕獲するので、農作物の被害防止効果は大きい。



シカが集まる耕作放棄地を選定

効果的捕獲場所としての耕作放棄地

■ 耕作放棄地活用のポイント

- 農地に侵入する目的でシカが集まっていることから、わなで捕獲しやすい。
- 農地周辺で被害獣を直接捕獲することから、農作物の被害防止効果が高い。
- 平坦で設置作業がしやすい。農道があり作業性が良い。
- 農家が管理する農地に隣接していることから、農家との連携が可能。
- 侵入防止柵が整備されている場所でないとワナの設置は不可。

(2) 耕作放棄地の整備

耕作放棄地は、雑草・灌木に覆われているので、草刈りを行って捕獲地として利用できるように整備を行います。草刈りは、わなを置く場所とシカが集まって遊ぶ場所として50～100㎡程度行って下さい。



草刈りを行い捕獲地に整備

■ わな設置前の手順

- 草刈り・灌木の除去：わな設置場所とわな周辺にシカが集まれる場所を確保。
- 設置スペースの確保：軽トラックで接近でき、作業性と安全性を向上。
- 新芽の誘引効果：草刈り後に発生する新芽がシカを自然に引き寄せる。



雑草が繁茂している状態



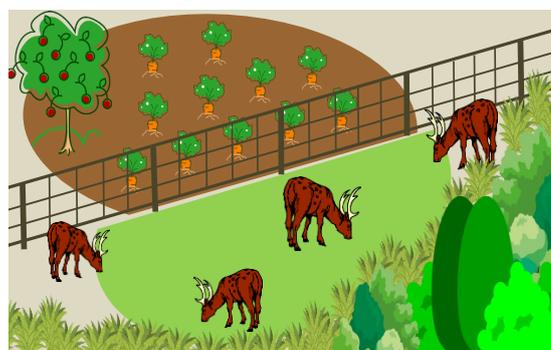
除草後の開けた状態

(3) シカの誘引を強化（耕作放棄地にシカを誘引）

耕作放棄地の草刈りを行うと、新芽が発生してそれを食べにシカが集まります。

新芽を食べにシカが出始めた頃にヘイキューブによる餌付けを行い、ヘイキューブを餌と認識させます。

シカがヘイキューブを食べるようになるまで1～2週間程度かかりますが、その後はヘイキューブを好んで食べるようになります。



捕獲地の整備によりシカが集まる

わな設置前の餌付け

■ 餌付け前の準備

- 耕作放棄地は雑草・ススキ・灌木に覆われていることから、そのままでは不向き。
- 草刈りをすることによってわなの設置場所を確保できるとともに、草刈り後に発生する新芽がシカの餌となることから、シカが自然に集まる環境になる。
- ススキなどはシカが好まないため、草刈りで食べやすい環境に整える必要がある。
- 灌木類も根元から伐採して、シカが集まりやすい環境を整えて下さい。

■ 餌付けの手順

- 草刈り後にシカが集まるようになったら、ヘイキューブを散布し餌と認識させる。
- 最初はヘイキューブを食べませんが、2週間程度で食べるようになります。
- 実証試験で、ヘイキューブでの誘引が可能であることは確認されています。

■ 餌付けのポイント

- ヘイキューブはシカが好む飼料。保存がきき、扱いやすく、管理が簡単。
- 毎日少しずつ補充することで、シカがヘイキューブで誘引されるようになります。
- センサーカメラを活用すれば、食べ始めのタイミングや行動が確認できます。



ヘイキューブ



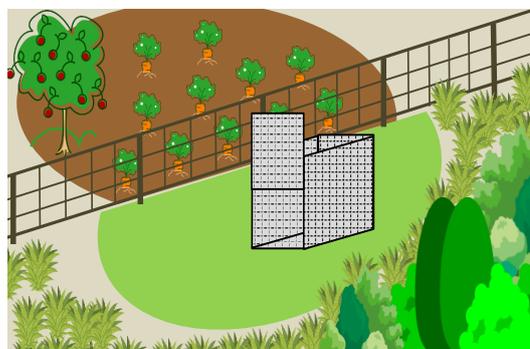
草刈り後の耕作放棄地に集まるシカ

(4) わなの設置

ヘイキューブに誘引されるようになったら、整備した場所の真ん中にわなを設置する。

わな内への誘引もヘイキューブを使い、餌は1日で食べきれぬ量にします。大量に入れると食べきる前に腐敗することがあります。餌は常に新鮮なものにして下さい。

誘引用の餌にヘイキューブを使うのは、シカを選択的に捕獲するためです。クマなどの錯誤捕獲防止にもなります。シカの餌としては、ヌカなどを使うことができますが、イノシシなどの獣類を誘引することから、シカの捕獲には使いません。

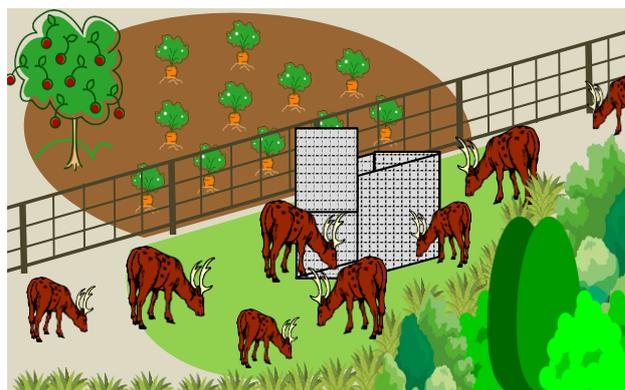


シカが集まってからわなを設置

(5) 捕獲開始

わなへの誘引が定着してから捕獲を始めて下さい。

わなは移動させることなく、継続して捕獲することができます。ただし、床面が荒れた場合は、2m程度移動させて下さい。



農地周辺で加害獣の捕獲が可能

わなの設置と管理のポイント

■ わな設置の手順

- 草刈り後にヘイキューブによる誘引を行い、わなの設置を開始します。
- わな周辺と内部にヘイキューブを少量ずつ配置してワナに誘引します。
- 餌は毎回食べきる量のみ散布し、常に新しい餌に交換します。

■ 設置の留意点

- センサーカメラの併用を推奨：シカの行動確認に役立つ。
- 大量の餌は不利に働く：余った餌が劣化しやすく、不衛生になりシカが避ける。
- 捕獲は夕方～深夜が多い：人の出入りが少なければ昼間でも捕獲可能。

■ 捕獲中の管理

- わな周辺にシカが集まる耕作放棄地では、同じ場所で継続的な捕獲が可能。
- わな内の地面が荒れた場合は約2m移動して再設置すると効果が続きやすい。



- ☝ センサーカメラでシカの頭数を確認
- ☝ 「しかとっちゃん」の特徴
- ☝ わなが高く、開口部 110cm、床面は地面

(6) わなの見回り

有害捕獲のわな見回りは、捕獲隊の捕獲者が行いますが、農地周辺で有害捕獲を行う場合、農地を見回る農家の方もわなを見て捕獲情報を知らせるなど、農家と捕獲隊が連携して共に農業被害を防ぐ取り組みを推奨します。

■ 狩猟者（捕獲者）の役割

- わなの設置・稼働・回収などのすべての捕獲作業を担当。
- 設置後は、餌付けと毎日の見回りを基本とする。
- 捕獲があった場合の処理や報告対応も担う。
- 課題：高齢化が進んでおり、持続的な捕獲のためには見回り負担の軽減が必要。

■ 農家（土地所有者）の役割

- 自身の農地に設置されているわなの日常적인見回りに協力する。
- わなは直接操作せず、餌の減り具合や捕獲の有無を確認する。
- 捕獲を確認したら捕獲者に連絡して処理を依頼する。
- 有害捕獲の支援を通じて、協力体制を明確化することが大切。

■ 地域関係者との協力体制

- 狩猟者と農家が情報を共有し、無理のない連携体制を構築する。
- 農家の日常の農作業とわなの見回りを兼ねる効率的な仕組みとする。
- 地域ぐるみで、有害捕獲の効率化と持続的な体制を支援する。



狩猟者によるわなの見回り



捕獲されたシカ

(7) 捕獲・殺処分

捕獲したら、安全を確認しながら殺処分して、わなから取り出す。

(8) 新たな場所に移動

誘引するシカが少なくなったら、わなを移動させて捕獲を行う。

《用語解説》

シカの生息密度：特定の地域に生息するシカの個体数を面積あたりで表したものです。一般的に「頭/km²」（1平方キロメートル当たりの個体数）で示されます。シカの生息密度が高い地域では、森林や農作物への被害が大きくなるといわれています。農林業被害は、生息密度が10頭/km²以上になると被害が確認されるようになり、20頭/km²以上になると被害が顕著になるといわれています。

餌付け：餌を使って、野生動物をわなに誘導するための技術です。わなの中に誘導させるためには、動物の警戒心を解くために好みの餌を選択して、撒き方を工夫する必要があります。最初はわなの外側に餌を置いて、徐々にわなの内部に誘導します。

ヘイキューブ：ヘイキューブ（Hay Cube）は、牧草を乾燥・圧縮してキューブ状に成型した飼料です。主にアルファルファなどのマメ科牧草を原料としており、栄養価が高く、長期保存が可能な飼料です。

センサーカメラ：動体検知や熱感知などのセンサーを搭載し、特定の動きを捉えて自動で撮影・録画を行うカメラです。野生動物の観察や防犯、施設管理などの広い用途で活用されています。

《おわりにあたって》

県内のシカ被害は、林業分野から農業分野へ、県の西部地区から中部・東部地区へと拡大しています。本マニュアルが農林業被害の軽減に役立つことを願っています。

なお、このマニュアルには、「しかとっちゃん」を地元の鉄工所で製作できるように「わなの設計図」「使用資材一覧」「加工組立」などを別冊として公表していますので、ご活用いただければ幸いです。

最後に、「しかとっちゃん」の開発に当り多大なご協力をいただいた、(株)フジサワ鐵工（長門市油谷久富 326-1/TEL：0837-32-2363）に謝辞を申し上げます。